堀内家文書目録

目次

解題

1伝来と受け入れの経緯……4
2堀内信について……4
3文書群の整理と概要について……4
4その他資料と参考文献……5

目録

一、堀内信筆原稿・書……6
二、写真……6
三、書・文書（堀内信筆以外）……6
四、名著通信……7

堀内家文書解題

1 伝来と受け入れの経緯

堀内家文書は、埼玉県浦和市在住の堀内京子氏所蔵文書一九点の総称である。

堀内家は元紀州藩士であり、明治維新後は紀州徳川家に従い関東に移住した。幕末から明治期の九代当主堀内信（ほりのうちまこと）は、紀州藩史研究の基本史料とされる『南紀徳川史』一七二巻（明治三四〔一九〇一〕年完成）等を編さんした。しかし、当家の古文書類や信の残した多くの史料や文書は、関東大震災や第二次世界大戦時の空襲などでほとんど失われたという。しかし、京子氏は信の第四子仁四郎の娘にあたることから、失われたものとは別にこの文書をうけついで来られた。今回所蔵文書の中から、紀州藩・和歌山関係のものを、二度に分けて御寄託いただいた。

受け入れに至った経緯は、はじめ堀内京子氏が知人の中央大学名誉教授神保博行氏に文書の保管について相談なされ、神保氏が堀内家の出身地であり、この文書群に縁の深い和歌山県での保管を勧められたことから、当文書館へ寄託いただくこととなったのである。

当館では、寄託の意向を請けて、まず平成六年四月に館員が埼玉県の堀内家へ伺い、その場で一六点の寄託をうけることとなった。その後平成七（一九九五）年六月に追加として当館へ三点を直接ご持参になり、寄託いただいた。

2 堀内信について

堀内信は天保四（一八三三）年紀州藩士の子として江戸赤阪藩邸丸山口に生まれ、二一歳で表御用部屋認物勤となる。慶応四（一八六八）年家督相続し堀内家九代目となる（知行一〇〇石）。同明治元年一二月孔雀ノ間詰並御目付（知行二〇〇石加増）。翌年二月牟婁下郡民政知局事。同年一一月和歌山藩少参事に任じられる。明治五年一一月紀州徳川家家扶となり、翌六年六月旧臣の子弟八人を連れて神戸に行き商業研究をする。その後明治二〇（一八八七）年八月に東京麻布飯倉の紀州徳川家邸内に移住し会計取締役となる。その頃藩主事績が余りにも不備であることに衝撃を受け、徳川茂承に上申して、その編さんを命じられた。二二年二月には三河国碧海郡鴛鴨村開墾にもたずさわるが、それらのかたわら邸内蔵書をはじめあらゆる資料を収集し、古老やゆかりの人物に聞き取りや質問を行い、和歌山県庁や諸寺社等をたずねて資料の収集にあたった。そして明治二九年七月『南紀徳川史』前集七〇巻が完成。明治三三年一二月からは徳川家を辞職し編さんに専念、翌三四年一〇月ついに『南紀徳川史』一七二巻が完成。紀州徳川家に呈上した。その後明治四〇（一九〇七）年には幕末維新期をあつかった『海結溢言』を編さん。大正九年七月三一日没。東京赤坂台町報土寺に埋葬される。八八歳。

3 文書群の整理と概要について

受け入れが二度にわたったため、整理も二度に分けておこなった。元の保存現状がわからないが、受け入れ時の状態で整理をおこなった。軸装されているものは一点ずつ箱に入れられているが、総点数が少ないので特に箱番号を付したり整理番号を別にしたりはしていない。

概要は以下の通りである。

一、堀内信筆原稿・書　　原稿は二種類有る。まず文書1の「南紀物語」は明治三七（一九〇四）年に書かれたもので、例言に

「國祖南龍公初の國史ハ公家の世記既に完備するものありと且二百巻に垂んとする大冊如何に採要節略すとも到底小冊子の及ふ処に非されハ暫く之を他日に譲り単に筆を紀州最終の國君茂承公に起し國祖以来空前絶後大艱至難の世に能く國治を謀らせ以て龍祖が　天朝幕府より預り玉へる版図を奉還せらる龍祖ハ之を首にし公ハ之を終にし以て首尾赫々の國職を尽し給ふ故に是之を詳にす、右の如しと雖も世々の略をも皆目掲けされハ明治同胞の紀人或ハ其起因乃至旧國主の名称さへ恍として知る者なきに至らん依て首に歴世略表を掲け次に同事略を記す…」と有る。つまり『南紀徳川史』の紀州家部分の要約的なもので、領地や城についての記述（和歌山城の図あり）と紀州家歴世事略（各歴代藩主につき）とからなり、六〇〇字詰原稿用紙三六枚に書かれている。未発表原稿。

もう一種類は文書2～5で、『南紀徳川史』16冊（巻之百四九）の「大奥御服図」の下絵原稿の一部と考えられる。色や模様の指示が加えられ、朱にて訂正がほどこされ、あるいは不採用原稿もある。『南紀徳川史』は文章だけではなく挿絵についても堀内信自身が描いたものであり、信直筆の資料としては大変重要なものである。（口絵4参照）

書は一点で、明治四四年に信が徳川家康の「人の一生は…」を墨書したもので、軸装の上木箱に納められている。

二、写真　一点。堀内信自身が軸三点と、もう一人の人物（氏名不明）と共に写っている。

三、書・文書（堀内信筆以外）　三点。内二点は紀州徳川家一一代斉順と一四代茂承筆の書であり、拝領品と考えられる。以上は軸装の上各々木製箱入り。残り一点は木下順庵門下の榊原玄輔筆の文書で全文漢文。なお、この三点が堀内家文書中二度目に寄託された三点全てである。

四、名著通信　名著出版から『南紀徳川史』復刻版が出された時、名著出版社が各巻に付した小冊子九点で、一点目には、「『南紀徳川史』と父」の題で、信第四子の仁四郎（京子氏父）が、編さん時のエピソードを交えて紹介文を書いている。残りの八点には堀内信が明治二年に紀州牟婁郡民政局役人として現地に赴任した時、そこでの出来事や当時の熊野地方の風俗などを自筆の絵に説明文を添えて描いた「老の苧環」（未出版）が紹介されている。これも名著出版社からの依頼を受けて、堀内家が絵を写真に撮り、説明文を口語体に直した原稿を作成して提供されたものである。ここに残るものは、その印刷完成物である。印刷年代は新しいが、信の未発表作品の復刻（一部だが）として貴重である。

4その他資料と参考文献

『南紀徳川史』堀内信編　南紀徳川誌刊行会　昭和五～八年（昭和四五～同四七年に名著出版より復刻版　本編一七冊・総目次一冊が出されている。）

「『南紀徳川史』の完成年について」三好國彦　（『『南紀徳川史』研究1』一九八六年　『南紀徳川史』研究会）

※　文書整理・目録作成は鎌田和栄がおこなった。

一、堀内信筆原稿・書

利用番号	標題	整理番号	年代	作成者	宛名	形態
2	〔大奥御服図原稿〕 ※『南紀徳川史　巻之百四九』　御簾中様御服元日御服・御元服後五節句御服	2	（明治）	（堀内信）		一紙
3	〔大奥御服図原稿〕 ※『南紀徳川史　巻之百四九』　御元服後平日午後御召替・御姫様方（不採用）	3	（明治）	（堀内信）		一紙
4	〔大奥御服図原稿〕 ※『南紀徳川史　巻之百四九』　女中髪様・御小姓女中・帯結ひ方	4	（明治）	（堀内信）		一紙
5	〔大奥御服図原稿〕 ※『南紀徳川史　巻之百四九』　長かもじ・びんづら・わらわの真紙・眉つけ道具・元結	5	（明治）	（堀内信）		一紙
1	南紀物語 ※原稿	1	明治37年3月	（堀内信）		竪帳
7	〔書〕 ※「人の一生は・・・」（徳川家康文）、木箱入	7	明治44年元旦	堀内信（如海翁七九歳）		掛軸

二、写真

利用番号	標題	整理番号	年代	作成者	宛名	形態
6	〔堀内信と掛け軸写真〕 ※もう一人の人物写る	6				写真

三、書・文書（堀内信筆以外）

利用番号	標題	整理番号	年代	作成者	宛名	形態
17	〔紀州茂承公一行書〕 ※木箱入、表題は箱書より	17		徳川茂承（一四代）		掛軸
18	〔紀州斎順公一行書〕 ※二重木箱入、表題は箱書より	18		徳川斎順（一一代）		掛軸
19	〔古風一篇〕 ※漢文	19	貞享丙寅[3]年九月	侍教生榊原玄輔		一紙

四、名著通信

8	名著通信 No.9 「『南紀徳川史』と父」 ※以下8～16迄一括封筒入、印刷	8	昭和45年10月26日	堀内仁四郎（著）・名著出版（発行）
9	名著通信 その1」 No.13 「『老の苧環』（堀内信著）について ※印刷	9	昭和46年2月24日	名著出版
10	名著通信 その2」 No.14 「『老の苧環』（堀内信著）について ※印刷	10	昭和46年	名著出版
11	名著通信 その3」 No.15 「『老の苧環』（堀内信著）について ※印刷	11	昭和46年4月22日	名著出版
12	名著通信 その4」 No.16 「『老の苧環』（堀内信著）について ※印刷	12	昭和46年	名著出版
13	名著通信 その5」 No.17 「『老の苧環』（堀内信著）について ※印刷	13	昭和46年6月17日	名著出版
14	名著通信 その6」 No.20 「『老の苧環』（堀内信著）について ※印刷	14	昭和46年7月17日	名著出版
15	名著通信 その6」 No.20 「『老の苧環』（堀内信著）について ※印刷	15	昭和46年7月17日	名著出版
16	名著通信 その7」 No.21 「『老の苧環』（堀内信著）について ※印刷	16	昭和46年	名著出版